

If 節内に be going to が生起している条件文についての考察

森創摩

englishlangmori@gmail.com

キーワード：後方転移 予測的条件文 非予測的条件文 開放条件 閉鎖条件 未来表現

要旨

本稿は、if 節内に be going to が生起している条件文について、Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) の枠組みにおける予測的条件文と非予測的条件文の2つの場合があると主張する。if 節内の be going to に対して、我々は、be going to は未来を示す助動詞表現であるために if 節内は後方転移されていないとする見方と、be going to の be 動詞に注目して be 動詞が後方転移されていると見る見方とをすることが可能である。前者の見方をしている場合には、その if 節は非予測的条件節であり、後者の見方をしている場合には、その if 節は予測的条件節である。

1. はじめに

次の (1) に示されているように、条件節内では、その内容が未来のことであっても現在時制が用いられる。この言語事実に対する説明方法については各学者によっていろいろと説が出されている (e.g. Jespersen (1924, 1931), Allen (1966), 安藤 (2005), De Wit (2017) など)。

(1) If it *rains* tomorrow, the game will be cancelled. (Declerck 1991a: 192)

しかしながら、どの学者の説が正当であるにしても、条件文 (If p, (then) q) の if 節内に未来を示す表現が生起可能であるというのは事実と言える。実際、(2) - (3) に示されているように、if 節内に will は生起できる (if 節内に生起している will については、第 2.2 節で詳しく説明する)。if 節内に現れる未来表現を扱ったものとして、(2) - (3) のような、条件節内に生起する will に関する研究がこれまでに非常に多く提出されているが (Poutsma (1926), Jespersen (1931), Allen (1966), Palmer (1974, 1979, 1983, 1988, 1990), Close (1980), Comrie (1982, 1985), Declerck (1984, 1991a, b), Haegeman and Wekker (1984), Jacobsson (1984), Quirk et al. (1985), Nieuwint (1986), Leech (1987, 2004), Dancygier (1998), 田中 (1998), Declerck and Reed (2001), 吉良 (2002, 2018), Dancygier and Sweetser (2005), 岡本 (2005) など)、(4) と (5) に見られるように、be going to も if 節内に生起できると言える¹。

¹ ピーターセン (1990: 123-124) は、条件節内に未来形の will が使用されている例と使用されていない例の意味の違いを説明するために、以下の (i) と (ii) の例を挙げて、(i) と (ii) について次のように説明している。「もし、最終電車で間に合わなかった場合、友達に駅まで迎えに来てもらって、そして家まで送ってもらえるよ

- (2) I will come if it *will* be of any use to you. (Jespersen 1931: 262, 400, Palmer 1990: 178)
- (3) (医者が “Oh, he’s sure to be better tomorrow.” と言ったのを聞いて)
If he’ll get better by tomorrow, I won’t cancel our theater tickets. (Dancygier and Sweetser 2005: 88)
- (4) I’ll ring you up if I *’m going to* be late for dinner.
(Jacobsson 1984: 132, Declerck and Reed 2001: 157)
- (5) If there’s *going to* be a hard frost I’ll put some protection over the camellia.
(Declerck and Reed 2001: 157)

このように、(2) - (5) に見られる言語事実から、条件節内では未来のことを指示していても現在時制が用いられなければならないと簡単に決めてかかるべきではないと理解できる (is/am/are going VP 及び will は、その語形自体に単純現在時制形式が使用されているが、Palmer (1979, 1988, 1990), Quirk et al. (1985), Thomson and Martinet (1986), Leech (1987, 2004), Declerck (1991b), Leech and Svartvik (1994, 2002), Leech et al. (2001), 安藤 (2005) などは、be going to と will をどちらも未来時を示す表現形式の一つとして扱っている)。

先ほども述べたように、if 節内に will が生起している条件文に関する研究はこれまで数多くなされてきた。しかし、if 節内の be going to に関する研究は Coates (1983), Brisard (2001), Huddleston and Pullum (2002), Lansari (2009) を除いてほとんどないと言える。Coates (1983) と Huddleston and Pullum (2002) は、be going to が生起している if 節の例文を挙げているだけにすぎず、Brisard (2001) は、if 節内に be going to が生起するのは performance error ではなく英語における事実であると述べているだけのものである。Lansari (2009) はフランス語との対照研究を目的としたもので、if 節内に be going to が生起する現象を明らかにしている研究とは言えない。

本研究の目的は、be going to が生起している条件節について、Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) における「後方転移」(backshift(ing)) という基準に基づいた「予測的条件文」(predictive conditionals) と「非予測的条件文」(non-predictive conditionals) という分

うに、電話する」という場合、前もって、友達に (i) とっておき、「今晚 7 時に彼女に会う約束をしているが、もしかすると、今日、新しい仕事が入ってくるかもしれない。その場合、約束の時間に間に合うはずがないので、その仕事が入ってきた時点で “ちょっと遅れるから” と彼女に電話しておく」というケースでは、前もって、彼女に (ii) とっておく。

(i) If I *am* late (for the last train), I will call you. (ピーターセン 1990: 124)

(ii) If I *will* be late, I’ll call you. (ピーターセン 1990: 124)

つまり、ピーターセンによると、(i) は「遅れてしまったら、電話する」ということであり、「遅れることになったら、電話する」ということならば、(ii) と言える、という。

しかしながら、筆者の行ったインフォーマント調査では、(ii) の文を容認する者は 1 人もいなかった。より具体的に説明すると、5 人のインフォーマントに、(ii) の例を提示し、(ii) は if 節内に will が使用されているが、例文 (ii) が ‘If, if I get obliged to do new work tonight, I will be late, I’ll call you.’ という文と同じ意味を指示するならば、(ii) は容認されるかときいたところ、5 人全員がそのような意味でも (ii) は容認されないと答えた(ちなみに、『ジーニアス英和辞典』の第 3 版と第 4 版には (ii) と同じ例が記載されていたが、第 5 版にはこの例は記載されていない)。ただし、インフォーマントによると、以下の (iii) のように、条件節内に be going to が使用される例は容認されるという。

(iii) If I *am going to* be late, I’ll call you.

詳しくは 4.2.1 節で論じるが、例文 (iii) は (4) と (5) と同じ性質のもので、p によって表される出来事・事態についての兆候は未来時に生じると想定されている。

類方法と、Declerck (1991a, b) と Declerck and Reed (2001) による条件の種類に関する知見を援用することによって、現象上の特徴を記述することである。

2. 条件文についての先行研究

本節では、条件文についての先行研究として、Declerck (1991a, b), Declerck and Reed (2001), Dancygier (1993, 1998), Dancygier and Sweetser (2005) を取り上げ、その分析方法を概観する。

2.1. Declerck (1991a, b) と Declerck and Reed (2001)

Declerck (1991a, b) では、条件節の分類として「開放条件」(open condition)、「仮想条件」(hypothetical condition)、「反事実条件」(counterfactual condition)、「閉鎖条件」(closed condition) という種類の条件が設定されている。まず、開放条件というのは、*p* で表されている内容の真否や成立について話し手の判断が含まれていない条件を表し、(6) のように一般に直説法と呼ばれる例はすべて開放条件である (Quirk et al. (1985: 1091), Dancygier (1998: 34) を参照)²。Declerck and Reed (2001) では、(6) の条件節は「開放 P 節」(open P-clause) と呼ばれている。

(6) I will be happy if we find a solution. [開放条件・直説法] (Declerck and Reed 2001: 54)

Declerck (1991a, b) は、*p* の内容が未来において実現されないだろうと話し手が思っている場合を仮想条件と呼び、話し手が *p* の内容が現在実現されていない、または過去において実現されなかったということを明示している場合を反事実条件と呼んでいる。Declerck の分類では、(7) が仮想条件の例で、(8) と (9) が反事実条件の例である。仮想条件と反事実条件はどちらも、一般には仮定法と呼ばれるものである。

(7) If he changed his opinions, he'd be a more likable person. [仮想条件・仮定法過去]

(8) They would be here with us if they had the time. [反事実条件・仮定法過去]

(9) If you had listened to me, you wouldn't have made so many mistakes.

[反事実条件・仮定法過去完了]

((7) - (9): Quirk et al. 1985: 1091)

また、Declerck (1991a, b) の言う閉鎖条件とは以下の (10) のように、*p* で表されている内容の実現が話し手にとって当然のこととして考えられているものである。

² 開放条件は、Declerck (1991a: 193) では、“a condition which may or may not be fulfilled in the future, but whose fulfilment is seen as a real possibility” と規定されている。

(10) A: (child in kitchen shouting to mother upstairs) Mummy, the kettle is boiling.

B: (mother) If the kettle is boiling you must take it off the fire. [閉鎖条件]

(Declerck 1991a: 193-194)

コンテキストから明らかなように、(10) における母親の発話は、お湯が沸いているということが事実であると前提とするものである。この閉鎖条件は Declerck and Reed では「閉鎖 P 節」(closed P-clause) と呼ばれている。

以上、Declerck (1991a, b) と Declerck and Reed (2001) による条件についての研究を概観した。

2.2. Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005)

次に、Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) の研究を紹介する。Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) は、条件文の大別分類として、「予測的条件文」(predictive conditionals) と「非予測的条件文」(non-predictive conditionals) という 2 つのタイプを提示している。

予測的条件文とは「後方転移」(backshift(ing)) が起こっている条件文で、非予測的条件文とは後方転移が起こっていない条件文である。後方転移とは、“The term ‘backshift’ should be applicable to every case of language use such that the time marked in the verb phrase is earlier than the time actually referred to.” (Dancygier (1998: 37)) と規定され、動詞によって標示されている時制が実際に指示されている時間より以前を表すことである。後方転移が起こっている条件文の例として、(6) - (9) が挙げられる³。(6) の条件節内では、未来を指示しているにもかかわらず現在時制が用いられている。(7) と (8) の条件節では、現在または未来を指示しているにもかかわらず過去時制が用いられなければならない。そして、(9) のような条件節では、過去時制ではなく過去完了形が用いられなければならない。このように、(6) - (9) のような例に見られる、p における動詞の時制形式に対する文法的制限を、Dancygier (1993, 1998) は後方転移と呼んでいる⁴。そしてさらに彼女は、予測的条件文では、p で表されている事態と q で表されている事態との間に因果関係があると述べている。彼女の言う因果関係とは、「因果連鎖」(cause-effect chains / causal chains) の知識を媒介としたものを意味する。実際、予測的条件文と関わる因果連鎖は以下の (11) のように記されている。

³ 「後方転移」(backshift) という用語は、Leech (1987, 2004) と Huddleston and Pullum (2002) にも見られる。しかし、彼らは Dancygier らとは根本的に異なった意味で用いている。例えば、Leech (2004) によると、次の (i) の understood は、‘I understand’ という文における動詞 understand が backshift されたものであるという。

(i) Zoe said that I *understood*.

(Leech 2004: 107)

⁴ Dancygier and Sweetser (2005) も、Dancygier (1993, 1998) と同じく予測的条件文と非予測的条件文という分類を認めているが、ここで一言及すべきことがある。それは、Dancygier and Sweetser (2005: 54) では、(7) - (9) のような一般に仮定法と呼ばれている if 節は後方転移ではなく「遠距離化」(distancing) を受けていると記述されている、ということである (cf. (6) のタイプの if 節 (一般に呼ばれるところの直説法) は Dancygier (1993, 1998) と同じく後方転移されていると Dancygier and Sweetser では記述されている)。

- (11) “What she[= the speaker] predicts is rooted in the knowledge of the present, and arrived at as the knowledge of consequences the present state of affairs may bring about via the knowledge of causal chains.” (Dancygier 1998: 46, 下線は筆者)

一方、非予測的条件文は、(10) や次の (12) の例に見られるように、後方転移という時制上の制限を受けていない条件文で、非予測的条件文における動詞形式は、その動詞形式そのものが表す時間を指示する (Dancygier (1993: 417, 1998: 61), Dancygier and Sweetser (2005: 122))。つまり、非予測的条件文の p (と q) は通常的一般規則 (独立節を支配する規則を指す) によって動詞形式が形成されているのである (Dancygier (1998: 61))。また、このタイプの条件文は、p から q を予測することを表すものではない⁵。実際、Dancygier (1998: 69) は、(12) は、q の予測ではなく「現在時になされた決心」(“a decision made at present”) を伝えるものである、と述べている。

- (12) If she is giving the baby a bath, I’ll call back later. (Dancygier 1993: 417, 1998: 62, 69)

条件節内に「予測」(prediction) を示す will が生起している条件文は、後方転移が起こっていないので非予測的条件文である。実際 Dancygier (1998: 119) は、if 節内に「予測」の will が使用されている条件文は非予測的条件文に限られると述べ、次の (13) を非予測的条件文としている⁶。

- (13) If he *won’t* arrive before nine, there’s no point in ordering for him.

また、(14) のように、未来を示す would も if 節内に生起することができ、(14) のような例も後方転移が起こっていないので非予測的条件文であると言える。

- (14) I will come if it *would* be of any use to you. (Shiratani 1994: 95)

⁵ 後方転移という基準に基づいて予測的条件文と非予測的条件文を条件文の下位タイプと認めると、Quirk et al. (1985) が「直接条件」(direct condition) と呼ぶ以下の (i) の例は、後方転移されておらず、通常的一般規則によって動詞形式が形成されていると考えるべきであるので、(i) は非予測的条件文である。

(i) If Colin is in London, he is undoubtedly staying at the Hilton. (Quirk et al. 1985: 1091)

また、Huddleston and Pullum (2002) は、以下の例文 (ii) を開放条件文としている。しかし、(ii) の if 節内には後方転移が起こっていないので、(ii) は非予測的条件文で、(ii) の if 節は (6) に見られる典型的な開放条件とは条件の性質が異なっていると言える。

(ii) If he bought it at the price, he got a bargain. (Huddleston and Pullum 2002: 748)

⁶ (13) の例に見られる if 節内の will の意味が「予測」(prediction) であると言える言語的証拠は、次のような例に見られる。

(i) If Le Pen *will probably* win, Jospin must be disappointed. (Haegeman 2006: 1652)

この例の if 節内における will と probably に注目していただきたい。probably は「法副詞」(modal adverb) あるいは「認識的副詞」(epistemic adverb) と呼ばれ (Traugott and Dasher (2002: 187-188), Traugott (2006: 115), Wierzbicka (2006: 261), Brinton (2008: 3)), will が法副詞/認識的副詞と共に起る以上、この例における if 節内の will の意味は「予測」であると言える。

同様に、「認識的モダリティ」(epistemic modality) を示す may が if 節内に生起している (15) のような例も後方転移が起こっていないので、非予測的条件文であると言える。実際、(15) の p は一般規則によって形成されている (cf. Lyons (1977: 797-798, 805-806) は、話し手の関与の仕方が主観的であるどうかに基づいて、認識的モダリティを「主観的な認識的モダリティ」(subjective epistemic modality) と「客観的な認識的モダリティ」(objective epistemic modality) とに区別し、(15) における may を「客観的な認識的モダリティ」と呼んでいる。

(15) If John *may* come tomorrow, Mary will leave.

(‘Mary will leave (now), if there is a possibility that John will come tomorrow’)

(Palmer 1988: 157)

ここで注意したいのは、(12) - (15) の例は先行研究 (Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005)) に基づくと、p から q を予測するという性質の構文ではないということである。実際、Dancygier and Sweetser (2005: 113) は、非予測的条件文には、(6) の例にある予測的關係はない (“There is no predictive relationship”) と述べている。つまり、(12) - (15) の例における因果關係は決して予測的条件文のそれと同じ性質のものではないということである^{7, 8}。

ここで、非予測的条件文の if 節と予測的条件文のそれは互いに異なったカテゴリーであることの言語的証拠を示す。予測的条件節と非予測的条件節が異なったカテゴリーである証拠として次の三点が挙げられる。第一に、以下の (16a, b) と (17a, b) の対比例に見られるように、予測的条件節と非予測的条件節を 2 つ含む条件文においては、非予測的条件節は予測的条件節の外側に位置しなければならない。つまり、非予測的条件節は予測的条件節よりも階層構造上、上位に位置している。

(16) a. You should invite her to tea *if you see her again if you like her so much*.

b. *You should invite her to tea *if you like her so much if you see her again*.

((16a, b): Bhatt and Pancheva 2006: 674)

(17) a. You should meet her *if she comes tomorrow, if you love her so much*.

b. *You should meet her, *if you love her so much if she comes tomorrow*.

((17a, b): Takami 1988: 267)

第二に、予測的条件節は分裂文の焦点位置に生起できるが (以下の (18a, b) を参照)、非予測

⁷ Declerck (1984) と Haegeman (1984) は、if 節の中には主節を発話するための動機づけ (“the speaker’s motivation for uttering the main clause”) を表すものがあると述べている。

⁸ unless と予測的条件文の if-not との違いは、予測的条件文の if 節と主節の間には因果連鎖でつながった因果關係があるが、unless にはそのような性質の因果關係 (すなわち、因果連鎖) がない、ということである (cf. 江川 (1991: 401))。実際、以下の (i) において if 節を unless Tom has an accident に置き換えることはできない。

(i) I’ll be surprised *if Tom doesn’t have an accident*. He drives too fast. (大学入試センター試験 1993 年度)

的条件節は分裂文の焦点位置に生起できない (以下の (19a, b) を参照)、ということが挙げられる。

- (18) a. It is *if it rains tomorrow* that the match will be cancelled. (Haegeman and Wekker 1984: 48)
 b. It is *if the student fails* that the teacher will fire the TA. (Bhatt and Pancheva 2006: 674)
- (19) a. *It is *if you like her so much* that you should invite her to tea.
 (Haegeman and Wekker 1984: 48)
 b. *It is *if she is giving the baby a bath* that I'll call her back.

第三に、予測的条件節は単独で Under what condition で導かれる wh 疑問文の答えになり得るが (以下の (20) を参照)、非予測的条件節は答えになり得ないということが (以下の (21) を参照) 挙げられる。

- (20) A: Under what condition will you invite her to tea?
 B: If I see her again. (Haegeman and Wekker 1984: 49)
- (21) A: Under what condition should I invite her?
 B: *If you like her so much. (Haegeman and Wekker 1984: 49)

以上見てきたように、Dancygier (1998) と Dancygier and Sweetser (2005) は条件文の大別的分類として予測的条件文と非予測的条件文を示している。そして、彼女らは、非予測的条件文を「認識的条件文」(epistemic conditionals) と「発話行為的条件文」(speech-act conditionals) の2つに下位分類している。認識的条件文と発話行為的条件文はもともと Sweetser (1990) が提示したもので、Dancygier (1998) と Dancygier and Sweetser (2005) が非予測的条件文の下位タイプとした認識的条件文と発話行為的条件文は Sweetser (1990) によるものをほぼそのまま踏襲していると言える^{9, 10}。

⁹ 認識的条件文は “[K]nowledge of the truth of the hypothetical premise expressed in the protasis would be a sufficient condition for concluding the truth of the proposition expressed in the apodosis.” (Sweetser 1990: 116) と定義され、認識的条件文について Dancygier (1998: 87) は、p を知っていることは q という結論を下す十分条件である (“the knowledge of p is a sufficient condition for concluding q”) と述べている。認識的条件文の典型例は、以下の (i) のように、q で表されている事態が原因で p がその結果となる出来事を示すものである。また (ii) において、話し手は p の内容を知っている (実際、(ii) は括弧内のようにパラフレーズされている (下線は筆者による))、(ii) は認識的条件文とされている。

(i) If she is not at home, she went to the dentist as planned. (Dancygier and Sweetser 2005: 113)

(ii) If they have to leave a message, (then) he's gone already.

(‘If I know that they have to leave a message, then I conclude that he's gone already.’) (Sweetser 1990: 123)

一方、発話行為的条件文は、Sweetser (1990: 118) によると “[T]he performance of the speech act represented in the apodosis is conditional on the fulfillment of the state described in the protasis (the state in the protasis enables or causes the following speech act).” と定義され、以下の (iii) と (iv) が発話行為的条件文の文例とされている。

(iii) I'll help you with the dishes, if it's all right with you. (Dancygier 1998: 89)

(iv) There are biscuits on the sideboard if you want them. (Sweetser 1990: 119)

¹⁰ Dancygier (1998) は、発話行為的条件文について以下の (i) のように説明し、Dancygier and Sweetser (2005)

本節では、まず Declerck (1991a, b) と Declerck and Reed (2001) による条件の分類方法を概観した (2.1 節)。次に、Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) が提示した、後方転移の制限が働いているか否かという基準によって条件文を予測的条件文と非予測的条件文に分ける方法を見た (2.2 節)。この分類の仕方は、p が適用される世界 (現実世界・可能世界など) や p の実現・非実現に対する話し手の判断・態度によって If p, (then) q という構造を細分化しようとする Declerck と Declerck and Reed の分類方法とは根本的に異なったものであり、後方転移という文法的制限はそれまでの条件文研究には見られない革新的なものであると言える¹¹。

従来の研究では、条件を示す副詞節内では未来のことであっても現在時制が用いられるという規則を守ろうとするあまり、if 節内に will のような未来表現が生起している条件文は、直説法条件節 (e.g. (6)) の例外的ケースという取り扱いを受けることがあった (Palmer (1974, 1979, 1988, 1990), Close (1980), Comrie (1982, 1985), Quirk et al. (1985), Leech (1987, 2004), 吉良 (2002) 等)¹²。しかし、後方転移を受けずに一般規則によって動詞形式が形成される条件文 (すなわち、非予測的条件文) を条件文の分類として認めることで、条件文の根本的な分類方法として、未来を示す表現が if 節内に生起してもよいと考えられるようになり、will をはじめとする未来表現 (may や would など) が現れている if 節 (e.g. (13) - (15)) は ((6) の例をその典型とする) 直説法条件節の例外的ケースではなくなるのである。

は、発話行為的条件文の定義を以下の (ii) のように記述している。

(i) “[*If*-clauses can bear a relationship to the speech act performed in the main clause rather than to its propositional content.” (Dancygier 1998: 89)

(ii) “Speech-act conditionals are cases where the *if*-clause appears to conditionally modify not the contents of the main clause, but the speech act which the main clause carries out.” (Dancygier and Sweetser 2005: 113)

このように、先行研究 (Sweetser (1990), Dancygier (1998), Dancygier and Sweetser (2005)) では、発話行為的条件文の説明方法について記述上の違いが見られるが (Sweetser (1990) による発話行為的条件文の定義は脚注 9 ですでに示した)、認識的条件文と発話行為的条件文の射程範囲は Sweetser (1990), Dancygier (1998), Dancygier and Sweetser (2005) において同じであるので、Dancygier (1998) と Dancygier and Sweetser (2005) は Sweetser (1990) の認識的条件文と発話行為的条件文をほぼそのまま踏襲していると言える。

¹¹ Declerck and Reed (2001: 231) は、以下の例に見られる、条件文における動詞の時制形式パターンを “canonical patterns” と呼んでいる。

Pattern 1: If she *comes* I *will tell* her everything.

Pattern 2: If she *came* I *would tell* her everything.

Pattern 3: If she *had come* I *would have told* her everything.

このことから、Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) によって示された予測的条件文と非予測的条件文という分類方法は、canonical patterns をなしているかいないかという基準で条件文を分類する方法であるとも言える。

¹² Palmer (1974, 1990) は条件文 (If p, (then) q) において、p と q との間の時間的順序関係に注目し、条件節内の will を‘時間順序の逆転’ (reversal of time relations) という視点から説明しようとした。これは「後未来」(after-future) という捉え方である。

また、Comrie (1982) によれば、この後未来の条件文には、q→p という順序で出来事が起こるだけではなく、q から p への因果関係があるという。例えば、(i) では、My telling a joke will cause your being amused. が成立していることが示されており、この q から p への因果関係があれば、if 節内に will の生起が見られるとされている。

(i) If it *will* amuse you, I’ll tell you a joke. (Comrie 1982: 150)

そして、Comrie (1985: 120) では、条件節内における will の生起条件を次の (ii) のように明確化している (吉良 (2002: 247, 2018: 63-65) を参照)。

(ii) 未来時指示の p と q が起こる順序が

① p→q の場合には、条件節内では現在時制が用いられなければならない。

② q→p の場合で、q から p への因果関係があれば、条件節内では will が使用されなければならない。

3. be going to の意味

本節では、be going to の表す意味とその使用状況について検討する。Quirk et al. (1985: 143, 214) は、be going to を「準助動詞」(semi-auxiliaries) に分類し、be going to を助動詞の一種として扱っている。また、Leech (2004) は、be going to の表す意味を (i) “future of present intention” と (ii) “future of present cause” の2つに分類している。以下の (22a - b) で使用されている be going to は (i) の用法で、(23a - b) における be going to は (ii) の用法である。

- (22) a. When *are you going to* get married? (Quirk et al. 1985: 214)
 b. What *are you going to* do this morning? (Westney 1995: 201)
- (23) a. She’s *going to* have twins. (‘She’s already pregnant’) (Leech 2004: 59)
 b. It’s *going to* rain. (‘I can already see black clouds gathering’) (Leech and Svartvik 2002: 78)

(22a - b) に見られる、Leech (2004) が “future of present intention” と呼ぶ用法 (以下、「意図用法」) は、Leech and Svartvik (1994: 76, 2002: 78) では、「現在の意図から生じる未来」 (“a future resulting from a present intention”) と述べられている。ここから、「意図用法」の be going to は、未来に行為を行おうという主語の意志が現在時 (すなわち、発話時) においてすでに存在している場合に使用される、と考えられる。本稿では、「意図用法」の be going to の使用状況制約を以下の (24) のように規定する (「意図用法」の be going to における be 動詞が過去形の場合、主語の意図・意志は現在時ではなく過去時において存在していたことを示す¹³。ゆえに、(24) の制約が適用されるのは、be going to の be 動詞が現在形 (すなわち、am/are/is going to) の場合に限る)。

(24) 「意図用法」を示す be going to の使用状況制約：

「意図用法」の be going to は、未来に行為を行おうという主語の意図・意志が、発話時 (すなわち、現在時) においてすでに存在している場合に使用される。

Leech (2004) と Leech and Svartvik (2002) は、自身が挙げた (23a - b) の例文に対して括弧内のようにコメントしている。そして、be going to の “future of present cause” の用法について、Leech et al. (2001) と Leech (2004) は以下の (25) と (26) のように規定している ((25) と (26) の下線は筆者)。

- (25) “*Be going to* is also used for a future event or state for which there are signs or tendencies already in the present” (Leech et al. 2001: 181)
- (26) “...there is the feeling that factors giving rise to the future event are already present; or (to be more

¹³ 「意図用法」の be going to は be 動詞が過去形の場合、通例、意図が実現しなかったということを含意する。
 (i) I *was going to* come, but I couldn’t. (安藤 2005: 103)

exact) it is as if THE TRAIN OF EVENTS LEADING TO THE FUTURE HAPPENING IS ALREADY UNDER WAY.” (Leech 2004: 59)

(25) と (26) の下線部から、be going to の “future of present cause”用法は未来に起こる出来事・事態についての兆候が現在時 (すなわち、発話時) においてすでに存在している場合に使われる、と言える (以下、be going to の“future of present cause”用法を「兆候用法」と呼ぶこととする)。Coates (1983: 201), Thomson and Martinet (1986: 187), 江川 (1991), Brisard (2001) も be going to の「兆候用法」について同様の説明をしている。従って、「兆候用法」の be going to の使用状況制約として、次の (27) を立てることができる。

(27) 「兆候用法」を示す be going to の使用状況制約：

「兆候用法」の be going to は、未来に起こる出来事や事態についての兆候が、発話時 (すなわち、現在時) においてすでに存在している場合に使用される。

以上本節では、be going to には「意図用法」と「兆候用法」という 2 つの意味的用法があることを指摘し、それぞれの用法について使用状況制約を示した。

4. 条件節内に生起している be going to についての議論

前節では、be going to は (i) 「意図用法」と (ii) 「兆候用法」の 2 つの意味的用法を持つということを見た。本節では、「意図用法」と「兆候用法」の be going to が if 節内に生起している条件文は Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) の枠組みにおける予測的条件文であるのか、それとも非予測的条件文であるのかを Declerck (1991a, b) と Declerck and Reed (2001) の知見を援用しながら議論することにより、if 節内に生起している be going to の現象上の特徴を記述する。

4.1. 非予測的条件節内の be going to

まず、非予測的条件文の if 節内に生起している be going to について検討する。予測的条件文の if 節内に生起している be going to は 4.2 節で扱われる。

4.1.1. 「意図用法」の be going to が生起している非予測的条件節

以下の (28) - (31) を見てみよう。(28) - (31) の if 節内では be going to が使用されている。

(28) If Millie *is not going to* work harder, she will not pass her exam. (Douven 2016: 150)

(29) You ought to lock your doors if you *'re going to* stay here. (Declerck and Reed 2001: 150)

(30) If you *are going to* eat spinach, REALLY *going to* — but you've got to promise! — I'll give you some candy. (土家 2003: 18)

- (31) If you're going to convict him, you will need hard evidence that there's anything illegal in what he said. (Linebarger 1987: 374)

これらの例における *is/are going to* は「意図用法」として解釈される。これらの例において、未来に行為をしようという (*is/are going to* の) 主語の意図・意志は発話時にはすでに存在していると言える¹⁴。このように、上記の例の *is/are going to* は (24) の使用状況制約に従っていると分かる。

以上から、(28) - (31) の例における *p* は後方転移を受けておらず、一般規則によって形成されていると言える。つまり、(28) - (31) の例は非予測的条件文である。このような、(28) - (31) に見られる *p* に後方転移が生じていないとする考え方は、*if* 節内の *be going to* を未来を示す助動詞と見る見方に基づくものである (このことについては後ほど 5 節で詳しく議論される)。

4.1.2. 「兆候用法」の *be going to* が生起している非予測的条件節

次に、以下の (32) - (34) の例を見てみよう。文例 (32) - (34) の *if* 節内における *be going to* は「兆候用法」である (この後すぐに見るが、先行研究の記述内容から (32) - (34) の *be going to* は「兆候用法」であると理解できる)。

- (32) If interest rates are going to climb, we'll have to change our plans. (Hopper and Traugott 2003: 3)

- (33) If you're going to lose your temper, I'm not going to / won't play. (Huddleston and Pullum 2002: 211)

- (34) If the water level is going to rise as high as this, then we ought to evacuate these houses. (Declerck and Reed 2001: 150)

Hopper and Traugott (2003) によると、(32) の *be going to* にはもともと持つ進行アスペクト性が残っているという。また、(33) の *be going to* について、Huddleston and Pullum (2002) は、聞き手がかんしゃくを起こす兆候が発話時点においてすでにある (“you have already shown signs of, or started, losing your temper”) と述べている。さらに、Declerck and Reed (2001) によると、(34) の *if* 節は閉鎖 *P* 節で、すでになされた陳述をエコーしているという¹⁵。

こういった先行研究の記述から、(32) - (34) の *if* 節内における *be going to* は「兆候用法」で、未来時に起こる出来事についての兆候は発話時点においてすでに存在していると言える。これにより、(32) - (34) の *if* 節内の *be going to* は (27) の使用状況制約に従っていると分かる。

このように、(32) - (34) の例における *p* は後方転移を受けておらず、通常的一般規則によっ

¹⁴ Declerck and Reed (2001: 150) によると、(29) の *if* 節は閉鎖 *P* 節 (Declerck (1991a, b) の枠組みにおける閉鎖条件に相当) で、すでになされた陳述をエコーしているという。

¹⁵ Haegeman (2003) によると、次の例はしばしばエコー的な読みを持つという。

(i) If (you say) it is going to rain this afternoon, why don't we just stay at home and watch a video?

(Haegeman 2003: 317)

て形成されている。つまり、(32) - (34) の例は非予測的条件文である。この考え方は、be going to を未来を示す助動詞と捉える見方に基づくものである (詳しくは 5 節で議論される)。

4.1.3. 認識的条件文と発話行為的条件文

次に、(28) - (34) の条件文は認識的条件文であるのか、それとも発話行為的条件であるのかについて検討しよう (認識的条件文と発話行為的条件文は脚注における説明ではあるが、すでに 2.2 節で見た (脚注 9 と 10 を参照))。結論から言うと、(28) - (34) の例は認識的条件文と発話行為的条件のどちらにも相当すると言える。

Sweetser (1990: 121-122) は次の (35) の主節は「申し出」(offer) という発話行為を行っており、この例を発話行為的条件文としている。

(35) If it will amuse you, I will tell you a joke. (Sweetser 1990: 121, Dancygier 1998: 118)

また、Dancygier and Sweetser (2005) は、次の (36) の例において話し手はこの if 節で表されていることが真であると知っているので、(36) を認識的条件文として取り扱っている (脚注 9 を参照)。

(36) If Mr. Armani is so desperate to be seen as an artist, he should have allowed himself to be treated as one. (Dancygier and Sweetser 2005: 122)

(28) - (34) の例において、if 節は、(35) のように、主節で表されている発話行為を引き起こしていると言える (発話行為的条件文に相当)。また、(28) - (31) の例において、p における主語の意図・意志は発話時にすでに存在しているので (脚注 14 に示したように、Declerck と Declerck and Reed の枠組みではこの if 節は閉鎖条件・閉鎖 P 節である)、(28) - (31) の p は真であることを話し手は知っていることとみなすことができる (認識的条件文に相当)。さらに (32) - (34) において、p で指示される出来事・事態についての兆候は発話時に存在しているので (4.1.2 節を参照)、(32) - (34) の p は真であることを話し手は知っていることとみなすことができる (認識的条件文に相当)¹⁶。このように、(28) - (34) は発話行為的条件文であるとも認識的条件文であるとも捉えられる。実際、Sweetser (1990) は、条件文の解釈は文脈の影響を受けることがあることを認め、認識的条件文と発話行為的条件文との間にあいまい性 (ambiguity) を認めている。つまり、(28) - (34) の例は、発話行為的条件と認識的条件文のどちらの解釈も可能で、発話行為的条件文と認識的条件文との間であいまい (ambiguous) なのである。

¹⁶ Declerck and Reed (2001: 150) は (28) - (34) のような if 節を閉鎖 P 節としている。

4.2. 予測的条件節内の *be going to*

本節では、予測的条件文の *if* 節内に生起している *be going to* について検討する。まず、「兆候用法」の *be going to* が条件節内に生起している場合について検討し (4.2.1 節)、その後、「意図用法」の *be going to* が条件節内に生起している場合について検討する (4.2.2 節)。

4.2.1. 「兆候用法」の *be going to* が生起している予測的条件節

以下の例文 (37) - (40) を見ていただきたい。

- (37) I'll ring you up if I'm *going to* be late for dinner. (= (4))
 (38) If there's *going to* be a hard frost I'll put some protection over the camellia. (= (5))
 (39) If I *am going to* be late, I'll call you.
 (40) If you *are going to* arrive at a later hour than was intended, remember to telephone.

(Coates 1983: 202)

これらの例における *be going to* の意味自体は「兆候用法」であると言える。しかし、これらの例の *p* で示されている未来の出来事・事態についての兆候は発話時に存在していない (すぐ後に述べるが、兆候は発話時より未来に生ずる)。ゆえに、これらの例における *be going to* は (27) の使用状況制約に違反していることになる。(27) の使用状況制約に触れているにもかかわらず、なぜ *be going to* は (37) - (40) の例において使用できるのであろうか。また、(37) - (40) の例は予測的条件文なのであろうか、それとも非予測的条件文なのであろうか。

まず、(37) - (40) の条件節内には後方転移が起こっていると言える。*be going to* は *will* と同じく未来を示す助動詞として扱われるのが通例で、*be going to* が生起している *if* 節は後方転移されていないとみなされるべきであろうが (実際、*will* が生起している *if* 節は後方転移が生じておらず、非予測的条件文であると 2.2 節で述べた)、(37) - (40) の *if* 節内になぜ後方転移が起こっているのかというと、(37) - (40) の *if* 節内における *be going to* の *be* 動詞だけに注目すると、使用されている動詞形式は現在時制 (*am/is/are*) であるからである。(37) - (40) の条件節内の動詞形式にのみ目を向けると使用されている時制形式は現在時制 (*am/is/are*) であるので、(37) - (40) の条件節内は後方転移されていると言えるのである。ゆえに、(37) - (40) の例は予測的条件文である。

次に、(37) - (40) の例における条件の種類は、Declerck (1991a, b) の枠組みに基づく開放条件であるということに注意する必要がある (開放条件については 2.1 節を参照)。実際、Declerck and Reed (2001: 157) は (37) と (38) の *if* 節を開放 P 節 (Declerck の言う開放条件に相当) としている。このことから、(37) - (40) の例では、*p* で表されている内容の真否や成立について話し手の判断が含まれていないと言える。ここで、(37) - (40) の例について、*p* で表される出来事・事態についての兆候は発話時より後 (すなわち、未来時) に生ずると想定されていると考えると、(37) - (40) の *if* 節は、その内容の真否について話し手の判断が含まれていない条件 (すな

わち、開放条件) であることの説明がつく。そして、(37) - (40) の例において、p で表される出来事そのものはその兆候が現れる未来時よりさらに遠い未来に起こると想定されている。

以上から、(27) の使用状況制約を満たしていないにもかかわらず (37) - (40) の if 節内に be going to が使用できるのは、(27) の制約を立てるための基となった先行研究に、be going to は予測的条件節内に生起できる (換言すると、be going to は後方転移され得る) という視点が抜け落ちていたからであると言える。つまり、(27) を立てるための基となった先行研究は、be going to が独立節内に生起している場合しか扱っておらず、be going to が予測的条件節内に生起する場合を考慮していなかったと考えられるのである。

また (37) - (40) の例についてさらに注目すべきこととして、これらの例は予測的条件文であるので、これらの例には、p と q との間に因果連鎖の知識を媒介とした因果関係 (p が原因、q が結果) があるということである。2.2 節で見たように、予測的条件文には、因果連鎖の知識を媒介として p は q を引き起こす関係がある。

以上の議論から、(37) - (40) の条件文では、p で表される出来事・事態についての兆候も未来時に生ずると分かった。このような現象は以下の例にも見られる。(41) と (42) の例では、be going to は if 節内ではなく unless 節内と when 節内に生起している。Declerck and Reed (2001) では、これらにおける unless 節と when 節は開放 P 節 (Declerck (1991a, b) における開放条件に相当) であると言及されている。このことから、これらの例では、unless 節内・when 節内の出来事についての兆候は未来時に起こると想定されていると言える。つまり、(41) の unless 節内と (42) の when 節内では後方転移が起こっているのである。

(41) The police will not intervene *unless* the hooligans *are going to* use violence.

(Declerck and Reed 2001: 157)

(42) The police will intervene *when* the hooligans *are going to* use violence.

(Declerck and Reed 2001: 158)

以上から、後方転移を受けて、未来に起こる出来事・事態についての兆候も未来時に生じると想定されるという現象は if 節だけに限定されないと分かる。

本節では、(37) - (40) に見られる、be going to が生起している if 節について、動詞の時制形式は現在時制でも未来時を指示するという後方転移の制限が働くために、p で表される出来事・事態についての兆候も未来時に生じると想定される、と論じた。このことにより、(37) - (40) のような例では、p で表される出来事・事態についての兆候は発話時よりも未来に起こり、p の出来事・事態そのものは兆候が起こる時点よりもさらに先の未来時に起こると想定されていると分かる。

4.2.2. 「意図用法」の be going to が生起している予測的条件節

以下の (43) を見てみよう。

- (43) You were saying the other day, said the doctor, that you thought Alice might be negligent about her insulin. — No, I don't think so now. At least I'll see that she isn't. If she's *going to* take too much of the stuff or too little she'll do it whether we go away or not. (Spark, 90 in Lansari 2009: 210)

この (43) の if 節内に生起している *be going to* は「兆候用法」ではなく「意図用法」として解釈される。しかし、この if 節内の主語 (she) の意志は未来時に存在する (決して現在時にはない)¹⁷。ゆえに、(43) の *be going to* は (24) の使用状況制約に違反していることになる。この問題も (37) - (40) の if 節に起こっていたことと同じように、(24) の制約を立てるための基となった先行研究に *be going to* は予測的条件節内に生起できる (後方転移することができる) という視点が抜け落ちていたからと説明される。つまり、(24) を立てるための基となった先行研究は、「意図用法」の *be going to* が独立節内で使われる場合だけを扱い、予測的条件節内で使われる場合を考慮に入れていなかったと言える。

(43) の if 節は後方転移されている (つまり、(43) は予測的条件文である) と考えるならば、未来における行為を行おうという主語 (she) の意志は現在時ではなく未来時に存在すると言える。このように、(43) は予測的条件文であると考え、if 節内の主語の意志が未来時に存在することに説明がつく。これは、if 節内の *be going to* の *be* 動詞に注目し、*be* 動詞が後方転移されているとする見方である。

また、(43) の if 節は Declerck (1991a, b) の枠組みにおける開放条件で、(43) の p - q 間には因果連鎖の知識を媒介とした因果関係があると言える。

5. 条件節内の *be going to* に対する見方

4.1 節と 4.2 節で、*be going to* は予測的条件節と非予測的条件節のどちらにも生起できることを論じた。本節では、この 2 つのタイプの条件節内に生起している *be going to* に対してなされている見方について検討する。

まず、非予測的条件節に *be going to* が現れている場合について検討する。繰り返し述べるが、非予測的条件文とは、p が後方転移されずに一般規則によって形成されている条件文である。これは、独立節がそのまま (形を変えずに)p に埋め込まれた条件文であると言える。(29) (「意図用法」の *be going to* が使用されている例) と (32) (「兆候用法」の *be going to* が使用されている例) を例にして説明すると ((44) と (45) として再掲)、*You're going to stay here.* という独立節と *Interest rates are going to climb.* という独立節が p にそのまま埋め込まれているのである。

(44) You ought to lock your doors if you *'re going to* stay here. (= (29))

(45) If interest rates *are going to* climb, we'll have to change our plans. (= (32))

¹⁷ インフォーマント (筑波大学助教・イスマイロフ ムロド氏) も (43) における *be going to* の主語 she の意志は現在ではなく未来にあるとコメントした。

ここで注目すべきことは、「意図用法」(cf. (44)) であろうと「兆候用法」(cf. (45)) であろうと、be going to は未来を示す助動詞であるということである。2.2 節で見たように、Dancygier (1998) は、一般に未来を表すと言われる will は非予測的条件文の if 節にのみ生起できると述べている ((13) と以下の (46) を参照)。そして、will 以外の未来を表す表現が p で使用されている条件文も非予測的条件文であると言える。実際、(47) - (50) の例のように、will とは別の未来表現が p に生起している条件文を Dancygier and Sweetser (2005) は非予測的条件文としている。(47) では未来進行形 (will be-ing) が、(48) では確定的未来を表す現在進行形が、(49) では「可能性」を表す may (認識的用法の may) が、そして (50) では may よりも低い「可能性」を表す might が if 節内に使用されている ((14) と (15) の例も参照されたい)。これら (46) - (50) の例では、未来表現を含んだ独立節が p に埋め込まれていると言える。

- (46) If it *will* amuse you, I'll tell you a joke. (= (35))
- (47) If you *will be going to* Paris, why did you buy a ticket to Tokyo?
(Dancygier and Sweetser 2005: 123)
- (48) If the delegation *is arriving* tonight, we must see that we are ready to receive them.
(Declerck 1991a: 200)
- (49) If it *may* rain tomorrow, let's cancel the tennis game now. (岡本 2005: 160)
- (50) If you *might* buy a house in New York, you'd better consult Wendy.
(Declerck and Reed 2001: 106)

このように、非予測的条件節内の be going to は未来表現とみなされ、be going to が生起している非予測的条件節は、be going to を含む独立文が p に埋め込まれていると捉えられているのである。

次に、予測的条件節内に be going to が生起している場合について検討する。予測的条件文とは、p が後方転移されている条件文であった。will と同様に be going to は未来を表す助動詞類であるので、be going to は予測的条件節に現れ得ないと思われるかもしれない。しかし、be going to の be 動詞に後方転移を見出すことは可能である。(37) (「兆候用法」が使用されている例) と (43) (「意図用法」が使用されている例) を用いて説明すると ((37) と (43) を (51) と (52) として再掲する)、(51) (= (37)) と (52) (= (43)) の if 節内の動詞形式は後方転移を受け、現在時制形式の be 動詞 (am/is) が使われているのである。

- (51) I'll ring you up if I'm *going to* be late for dinner. (= (37))
- (52) You were saying the other day, said the doctor, that you thought Alice might be negligent about her insulin. — No, I don't think so now. At least I'll see that she isn't. If she's *going to* take too much of the stuff or too little she'll do it whether we go away or not. (= (43))

このように、be going to が生起している予測的条件節では、be going to は未来を表す助動詞類

ではあるが、be going to の be 動詞が注目され、be 動詞が後方転移されていると捉えられている。

be going to が、will をはじめとする他の未来を示す助動詞 (would, may, might など) と異なるのは、be 動詞が使用されているということである。be 動詞が使われているから、be going to は後方転移を受けることができるのである。これと同じ現象は以下の (53) にも見られる。

(53) If I'm likely to be late for dinner tonight, I'll call you.

(53) の if 節内では、be likely to という未来を示す助動詞類が使用され、実際 tonight という未来を指示する語句も共起している¹⁸。この例の if 節内は後方転移されていると言える。つまり、(53) は予測的条件文である。

以上本節では、次に述べることが論じられた。if 節内の be going to は未来を示す助動詞表現であるために後方転移されないと捉えられている場合に、その if 節は非予測的条件節である。一方、if 節内の be going to は未来を示す助動詞類ではあるが、be 動詞に注目して be 動詞が後方転移されていると捉えられている場合には、その if 節は予測的条件節である。

こうして、我々は、if 節内に be going to が使われている条件文に対して2つの異なった見方が可能であるということが分かった。

6. 結論

本稿では、be going to の持つ2つの意味的用法を「意図用法」と「兆候用法」と呼び、それぞれの用法についての使用上の制約として (24) と (27) を立てた。そして、条件節内に be going to が生起している条件文について、後方転移が働く場合と働かない場合の2つの場合があると論じた。条件節内が後方転移されていない場合 (非予測的条件文 (閉鎖条件)) では、p で示される未来の行為を行おうという主語の意志 (「意図用法」)、あるいは p によって表される未来の出来事についての兆候 (「兆候用法」) は発話時にはすでに存在している。一方、条件節内に後方転移が起こっている場合 (予測的条件文 (開放条件)) では、p で示される未来の行為を行おうという主語の意志 (「意図用法」)、あるいは p で示される未来の出来事についての兆候 (「兆候用法」) は未来時に起こると想定されている。

このように、be going to が生起している if 節が2つの場合に分かれるのは、(i) be going to を未来を表す助動詞類と見て後方転移を受けないと見る見方と、(ii) be going to の be 動詞にのみ注目し、be 動詞が後方転移を受けていると見る見方の2通りの見方があるからである。(i) の見方を取る場合は非予測的条件文で、(ii) の見方を取る場合は予測的条件文である。

以上本研究は、後方転移という基準に着目した Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) による予測的条件文と非予測的条件文という分類方法に基づいて、if 節内に be

¹⁸ Quirk et al. (1985) は、be likely to を be going to と同じ分類項目である準助動詞 (semi-auxiliaries) としている。

going to が生起している条件文は予測的条件文と非予測的条件文の 2 つの場合があると主張した。そして、Declerck (1991a, b) と Declerck and Reed (2001) による条件の分類 (開放条件・閉鎖条件) を援用し、それぞれの場合について、p で示される未来の行為を行おうという主語の意志、あるいは p で示される未来の出来事・事態についての兆候がいつ存在するのかという現象上の特徴を明らかにした。

参考文献

- Allen, Robert L. (1966). *The verb system of present-day American English*. The Hague: Mouton.
- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 東京 : 開拓社.
- Bhatt, Rajesh and Roumyana Pancheva (2006) Conditionals. In: Martin Everaert and Henk van Riemsdijk (eds.) *The Blackwell companion to syntax*. vol. 1, 638-687. Oxford: Blackwell.
- Brinton, Laurel J. (2008) *The comment clause in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brisard, Frank (2001) Be going to: An exercise in grounding. *Journal of Linguistics* 37: 251-285.
- Close, Reiginald A. (1980) Will in if-clause. In: Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (eds.) *Studies in English linguistics for Randolph Quirk*, 100-109. London: Longman.
- Coates, Jennifer (1983) *The semantics of the modal auxiliaries*. London: Croom Helm.
- Comrie, Bernard (1982) Future time reference in the conditional protasis. *Australian Journal of Linguistics* 2: 143-152.
- Comrie, Bernard (1985) *Tense*. London: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard (1986) Conditionals: A typology. In: Elizabeth Closs Trauott, Alice ter Meulen, Judy Snitzer Reilly, and Charles A. Ferguson (eds.) *On conditionals*, 77-99. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dancygier, Barbara (1993) Interpreting conditionals: Time, knowledge, and causation. *Journal of Pragmatics* 19: 403-434.
- Dancygier, Barbara (1998) *Conditionals and prediction: Time, knowledge, and causation in conditional constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dancygier, Barbara and Eve Sweetser (2005) *Mental spaces in grammar: Conditional constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- De Wit, Astrid (2017) *The present perfective paradox across languages*. Oxford: Oxford University Press.
- Declerck, Renaat (1984) 'Pure future' will in if-clauses. *Lingua* 63: 279-312.
- Declerck, Renaat (1991a) *Tense in English: Its structure and use in discourse*. London: Routledge.
- Declerck, Renaat (1991b) *A comprehensive descriptive grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Declerck, Renaat and Susan Reed (2001) *Conditionals: A comprehensive empirical analysis*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Douven, Igor (2016) *The epistemology of indicative conditionals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』 東京 : 金子書房.

- Haegeman, Liliane (1984) Pragmatic conditionals in English. *Folia Linguistica* 18(3/4): 485-502.
- Haegeman, Liliane (2003) Conditional clauses: External and internal syntax. *Mind and Language* 18: 317-339.
- Haegeman, Liliane (2006) Conditionals, factives and the left periphery. *Lingua* 116: 1651-1669.
- Haegeman, Liliane and Herman Wekker (1984) The syntax and interpretation of futurate conditionals in English. *Journal of Linguistics* 20: 45-55.
- Hewings, Martin (2013) *Advanced grammar in use*. Third edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott (2003) *Grammaticalization*. Second edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jacobsson, Bengt (1984) Notes on tense and modality in conditional *if*-clauses. *Studia Linguistica* 38: 129-147.
- Jespersen, Otto (1924) *The philosophy of grammar*. London: Allen & Unwin.
- Jespersen, Otto (1931) *A modern English grammar on historical principles*. Part IV. London: Allen & Unwin.
- 吉良文孝 (2002) 「条件文における Will の生起条件と時間の不可逆性」 *KLS* 22: 246-256.
- 吉良文孝 (2018) 『ことばを彩る 1 テンス・アスペクト』 東京：研究社。
- Lansari, Laure (2009) The *be going to* periphrasis in *if*-clauses: A comparison with the *aller*+infinitive periphrasis in French. *Languages in Contrast* 9: 202-224.
- Leech, Geoffrey (1987) *Meaning and the English verb*. Second edition. London: Longman.
- Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English verb*. Third edition. London: Longman.
- Leech, Geoffrey, Benita Cruickshank and Roz Ivanic (2001) *An A to Z of English grammar & usage*. Second edition. London: Longman.
- Leech, Geoffrey and Jan Svartvik (1994) *A communicative grammar of English*. Second edition. London: Longman.
- Leech, Geoffrey and Jan Svartvik (2002) *A communicative grammar of English*. Third edition. London: Longman.
- Linebarger, Marcia C. (1987) Negative polarity and grammatical representation. *Linguistics and Philosophy* 10: 325-387.
- Lyons, John (1977) *Semantics II*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nieuwint, Pieter (1986) Present and future in conditional protases. *Linguistics* 24: 371-392.
- 岡本芳和 (2005) 『話法とモダリティ～報告者の捉え方を中心に～』 東京：リーベル出版。
- Palmer, Frank R. (1974) *The English verb*. London: Longman.
- Palmer, Frank R. (1979) *Modality and the English modals*. London: Longman.
- Palmer, Frank R. (1983) Future time reference in the conditional protasis: A comment on Comrie.

Australian Journal of Linguistics 3: 241-3.

- Palmer, Frank R. (1988) *The English verb*. Second edition. London: Longman.
- Palmer, Frank R. (1990) *Modality and the English modals*. Second edition. London: Longman.
- ピーターセン, マーク (1990) 『続 日本人の英語』 東京 : 岩波書店.
- Poutsma, Hendrik (1926) *A grammar of late modern English*. Part III. Groningen: Noordhoff.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvick (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Shiratani, Atsuhiko (1994) Three *wills* in futurate *if*-clauses. 『活水論文集 (活水女子大学・短期大学) 37 英米文学・英語学編』 : 79-100.
- Sweetser, Eve E. (1990) *From etymology to pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Takami, Ken-ichi. (1988) The syntax of *if*-clauses: Three types of *if*-clauses and X'-theory. *Lingua* 74: 263-281.
- 田中廣明 (1998) 『語法と語用論の接点』 東京 : 開拓社.
- Thomson, Audrey J. and Anges V. Martinet (1986) *A practical English grammar*. Fourth edition. Oxford: Oxford University Press.
- Traugott, Elizabeth C. (2006) Historical aspects of modality. In: William Frawley (ed.) *The expression of modality*, 107-139. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Traugott, Elizabeth C. and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in semantic change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 土家裕樹 (2003) 『英語の意味と形式』 東京 : 英宝社.
- Westney, Paul (1995) *Modals and periphrastics in English*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Wierzbicka, Anna (2006) *English: Meaning and culture*. Oxford: Oxford University Press.

An Analysis on Conditionals with *Be Going to* in the *If*-Clause

Souma Mori

englishlangmori@gmail.com

Keywords: backshift, predictive conditionals, non-predictive conditionals, open condition, closed condition, future expressions

Abstract

The present paper argues that *be going to* can occur in the *if*-clauses of the predictive conditional and non-predictive conditional in the sense of Dancygier (1993, 1998) and Dancygier and Sweetser (2005). Because *be going to* is a kind of future expression, we can regard *be going to* in *if*-clauses as not backshifted. Also, in looking at *be*-verbs in *be going to*, we can regard *be going to* in *if*-clauses as backshifted. In the former case, the *if*-clause is non-predictive conditional clause, and in the latter one, the *if*-clause is predictive conditional clause.

(もり・そうま 千葉工業大学非常勤講師)